

戦争指導

統帥には強固な性格が必要

鎌田昭良

1939年に日ソ間の国境紛争として争われたノモンハン事件では、ソ連側では指導者スターリンが紛争を国際的な文脈の中でとらえて戦争指導し、しかも指導が現場レベルにまで浸透していました。他方、日本側では中央指導部がこの紛争の国際的な側面を十分考慮して戦争指導することなく、さらに中央が現地の関東軍にその意思を強要できずに独走を許しました。日ソ間の政治指導者の“統帥、上の差が出たということだろうと考えます。

ノモンハン事件の処理を現地関東軍で中心となって担っていた一人は作戦参謀辻政信中佐でした。ノモンハン事件に関わる多くの本のなかで、ソ連を相手に無謀な火遊びをしたと批判されている人物です。その辻が戦後、ノモンハン事件についてこんな説明をしています。

「新京で全満を見ながらノモンハンの局地を処理する立場と東京で世界を見ながら満州の局面を処理する立場とを心を^{むなしゆ}虚うして冷静に考えると、ノモンハンの処理をして更に賢明に、より巧みに收拾し得たであろうに。しかし統帥は数学ではない。血を流し骨を^む曝す戦場に於いては理性より感情に支配される真理を^{わかま}辨え、第一線兵団の感情を先鋭化させず、上級司令部の処理、指導に喜んで従わせるような人間味ある統帥でなければならぬ」

ノモンハン事件が失敗した原因は自分たちにはなく、中央の統帥が悪かったという非難に聞こえますが、他面、この辻の主張には統帥について重要なことが含まれているように思います。私なりに解釈すればこうです。戦争には戦争指導を行う中央と実際に戦う現場部隊とがあり、中央では“理性、に基づく大局的判断が求められるのに対し、第一線の戦闘現場では“感情、が支配する。つまるところ統帥とは理性と感情のぶつかり合いであり、感情を理性に従わせることだということです。

後世の私たちは戦いを机の上で学んでおり、理性的な判断が現場でなぜ受け入れられなかったのかと考えがちですが、人間社会で理性と感情がぶつかれば往々にして感情が勝利します。戦場で一旦戦闘が開始されれば勝利が追求され、激しい戦いとなります。そうなれば甚大な被害が生じ、その結果、敵に報復する感情が生まれます。また戦闘の激化とと

もに、戦うこと自体が目的化しそこに自らの名誉と誇りがかかります。ノモンハン事件でソ連軍と戦い、自らの第23師団がほぼ壊滅した小松原師団長は最後まで戦うことを主張しますが、その気持ちは理解できなくもありません。重要なことは、そうした激情が支配する世界を政治指導者が理性でコントロールしようとするなら政治指導者には強い覚悟と精神力が求められるということです。

プロシャの戦略思想家クラウゼビッツはその著『戦争論』の中で「視野の広い卓抜な頭脳、強固な性格こそ（戦争指導する）首相が持たねばならぬ主要特質である」と書いています。

考えてみれば、第2次世界大戦を戦った日米英独ソの主要5ヶ国の指導者は日本を除けばとても強固な性格の“個性的な、人物でした。ヒットラーが強固な性格だったかについては議論がありそうですが、戦勝国となった英米ソの政治指導者は強い精神力と視野の広い頭脳で戦争指導したように思います。ソ連の指導者スターリンの粗暴さを称えるつもりはありませんが、彼はノモンハン事件の直前に赤軍の大粛清を行いました。それは空前絶後の規模の粛清の嵐であり、赤軍を観察していた各国の駐在武官は赤軍はもはや恐れるに足らずと分析していました。確かに大粛清は赤軍の弱体化をもたらしましたが、非情な独裁者スターリンの統制が軍に行き渡った副次効果がありました。一方、日本の場合は政権を投げ出した近衛文麿首相は強固な性格の持ち主とは言えませんし、東条英機首相は几帳面な軍事官僚でした。

戦後、我が国は軍事に対する政治の優越が制度として確立するとともに、様々な形で政治指導者の決定を補佐する枠組みも作られました。しかしながら、政治指導者が軍隊を統制するという本質は変わっておらず、制度は人が運用するものである以上、戦時となれば現在でも広い視野と強い覚悟を持った政治指導者による統帥が不可欠であることは変わらないと考えます。

（この論考は、令和3年3月4日の朝雲新聞に、「前事不忘 後事之師」（第62回）として掲載されたものです。）